2011年10月21日

報道関係各位

新日本製鐵株式会社
公益財団法人 新日鉄文化財団

新日鉄文化財団「紀尾井シンフォニエッタ東京」の２０１２年米国公演について

新日本製鐵株式会社（社長　宗岡正二）の音楽を通じたＣＳＲ活動の中核である公益財団法人新日鉄文化財団（代表理事・進藤孝生、所在地：東京都千代田区紀尾井町６番５号 紀尾井ホール内）が運営する室内オーケストラ「**紀尾井シンフォニエッタ東京**」は、来春2012年4月に米国の国立美術館「ナショナル・ギャラリー・オヴ・アート」（所在地：米国・ワシントンD.C.）が実施するチェリー・ブラッサム・ミュージック・フェスティヴァルの公演に、正式招聘されました。このフェスティヴァルは日本から米国に桜を寄贈した1912年から百周年となることを記念して行われます。今回、「紀尾井シンフォニエッタ東京」は、米国東海岸４都市で以下の公演を実施いたします。

【公演予定日時・場所】
２０１２年
４月２７日（金）２０時　　ヴェライゾン・ホール（キンメル・センター／フィラデルフィア）
主催・公益財団法人 新日鉄文化財団
４月２９日（日）１８時３０分　ナショナル・ギャラリー・オヴ・アート（ワシントンＤ．Ｃ．）
主催・ナショナル・ギャラリー・オヴ・アート
５月　１日（火）１９時３０分　サンダース・シアター（ハーヴァード大学／ボストン）
主催・公益財団法人 新日鉄文化財団
／ハーヴァード大学ライシャワー日本学研究所
／ボストン日本協会
５月　２日（水）２０時　　アリス・タリー・ホール（リンカーン・センター／ニューヨーク）
主催・公益財団法人 新日鉄文化財団
※４月３０日（月）に、重度自閉症児の教育施設・ボストン東スクールでアウトリーチ演奏を予定。

【出演者】
オーケストラ　紀尾井シンフォニエッタ東京
指揮　ティエリー・フィッシャー
同行ソリスト　小菅　優（ピアノ）

【曲目】
モーツァルト：歌劇「フィガロの結婚」序曲KV492
モーツァルト：ピアノ協奏曲第２２番変ホ長調KV482
ベートーヴェン：交響曲第３番変ホ長調Op.55

米国におけるチケットの売上は、東日本大震災の被災地の音楽活動に対する復興支援金として寄付する予定です。

本件に関するお問合せ
公益財団法人 新日鉄文化財団
制作部　チーフマネジャー
花澤　裕
電話:03-5276-4672　FAX:03-5276-4527
E-mail　hanazawa@kioi-hall.or.jp

＜別紙＞

〇新日鉄文化財団
新日鉄は創立以来一貫して、「新日鉄コンサート」や「新日鉄音楽賞」の創設などを通じて音楽分野に対する支援を実施してきた。
新日鉄文化財団は、新日鉄が保有する音楽ホール「紀尾井ホール」の運営母体として、1994年11月に創設、2010年9月に、公益財団法人として認可された。
＜事業内容＞
・音楽家の育成
・演奏会開催
・すぐれた音楽活動に対する支援
・音楽ホールの管理・運営

〇紀尾井ホール
1990年の新日鉄創立20周年を記念し、音楽を通じたＣＳＲ活動の一環として創設。
クラシック音楽のための中ホール（800席）と、日本の伝統音楽・芸能の公演に適した小ホール（250席）を有す。

〇紀尾井シンフォニエッタ東京
1995年、レジデント・オーケストラとして誕生。第一線で活躍するソリスト、室内楽奏者５３名（2011年10月21日現在）で構成。日本各地での演奏のほか、欧州・韓国等の海外公演も実施。

＜海外公演の実績＞
・2000年、初の欧州6都市で公演を実施。ウィーン楽友協会、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ザルツブルク・モーツァルテウムなどの名門ホールで成功を収めている。
・2005年、ドレスデン音楽祭にて4公演出演。2003年に紀尾井シンフォニエッタ東京定期演奏会に登場した指揮者ハルトムート・ヘンヒェンからの熱い要望により、2005年5月には、自身が音楽監督を務める「ドレスデン音楽祭2005」から招聘を受け、4回の公演を行い、ヨーロッパの聴衆から絶賛を博し、新聞・雑誌などで高い評価を得た。
・2009年１月、弦楽アンサンブルによりソウルにて2公演を実施。新日本製鐵株式会社と韓国POSCO社との音楽メセナ交流の一環として、紀尾井シンフォニエッタ東京の弦楽アンサンブルによりPOSCOセンターとHOAMアート・ホールでソウル公演を実施。
・2010年７月、通常編成でソウルにて2公演を実施。オール・ベートーヴェン・プログラムにより、POSCOセンターとソウル・アーツ・センターで公演を行い成功をおさめた。

＜ご参考＞

１．日米桜寄贈 100 周年（外務省ウェブサイトより引用）

＜日米桜寄贈100周年とは＞

2012年は，日本が桜を米国に寄贈，植樹してから100周年を迎えます。米国に寄贈された桜はワシントンDCのポトマック河畔に植えられており，数本の原木を含めて毎年華やかに花を咲かせています。開花時期には，毎年数多くの行事が催されますが，これら行事を企画，運営するため，日米両国の幅広い層の人たちが力を合わせます。また，このポトマック河畔の桜を見るため，米国内のみならず，世界各国からも多くの訪問者が訪れるなど，日米交流，対日理解促進に貢献してきています。

本件周年事業では，日米同盟を深化させるための3本柱の一つである文化・人材交流を集中的に進め，両国国民がこれら各種事業に関与することによって，各々の国民が，過去の日米交流の歴史を振り返り，日米関係の重要性を認識し，これからの日米関係のあり方を考える機会を通じて，今後100年の日米関係の基礎を築くことを目的としています。

＜日米の友情の象徴としての桜＞

・日米両首脳は、安全保障、経済、文化・人的交流の三本柱を中心に、日米同盟を更に深化させることで合意。

・2012年桜寄贈100周年は、文化・人的交流の柱において中心的な役割を果たすことが期待される。

・桜は、100年以上にわたる日米友好関係の象徴。米国に対する他国からの寄贈物で、これに匹敵するものは仏からの自由の女神像のみ。100周年の機会を有効活用し、さらなる友好関係の発展につなげることが重要。

２．桜寄贈の歴史

アメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.のポトマック河畔の桜並木の桜は明治の終わりごろ、アメリカのタフト大統領夫人の希望を受けて、当時の尾崎行雄東京市長から贈られたものです。

日露戦争後、衆議院議員で東京市長の尾崎行雄は、講和に導いてくれたアメリカの恩義に報いたいと考えていました。一方、当時のタフト米国大統領夫人は、旅行作家であったエリザ・R・シドモア女史の勧めもあって、日本で桜の美しさに魅せられ、新しく首都となったワシントンのポトマック河畔に日本の桜を植える計画をすすめようとしていました。

1909年尾崎行雄は、在米の高峰譲吉博士や水野大使を通じてこの桜の植樹計画を知り、ワシントン市に桜の苗木を贈ることを決めました。タカジアスターゼやアドレナリンを発明して財をなし、米国政財界に活躍していた高峰譲吉博士の経費負担により、2000本の桜苗木が横浜の植木商に発注され米国に送られましたが、残念なことにこの2000本の桜の苗木はすべて病害虫のため、植物検疫上国内に持ち込むことが出来ず失敗に終わりました。この知らせを聞いた関係者は落胆し、尾崎行雄東京市長は高峰博士の支援を受けて再度桜を送ることを決定しました。

1912年（明治45年）2月14日、植物学の専門家らが周到に準備した桜苗木6040本を積んだ日本郵船「阿波丸」が横浜港からシアトルに向けて出航しました。苗木の半数はワシントンのポトマック河畔植樹用に、そして残りの半数は高峰譲吉博士や日本人の希望でニューヨークの「ハドソン・フルトン祭」におくるためのものでした。これらの苗木はシアトルからワシントンへ向け、冷蔵貨車で運ばれ、1912年3月26日に桜苗木はワシントンに無事到着しました。

1912年3月27日の植樹式では、タフト大統領夫人と珍田米国大使夫人がタイダル・ベイスン(貯水池）の北岸に最初の2本の桜（染井吉野）を植樹し、シドモア女史はじめごく少人数が臨席しました。式典の最後に、タフト大統領夫人は「アメリカン・ビューティ」のバラの花束を珍田大使夫人にプレゼントしました。この最初の2本の桜は記念碑とともに現存しています。

現在首都ワシントンで毎年開催されている「さくら祭り」の開会式は、植樹式の行われた場所で行われます。日米友好の桜はその後、多くの人々の熱意によって数を増やし、首都ワシントンに春の訪れを告げる花として多くの人々を楽しませています。

３．ナショナル・ギャラリー・オヴ・アート　　（同館ウェブサイト掲載の英文より和訳）

ナショナル・ギャラリーは、資本家で芸術作品の蒐集家でもあったアンドリュー・W・メロンからの寄贈を受け、アメリカ合衆国の人々のために、1937年に議会での共同決議により創設されました。1920年代に、メロン氏は国民のために美術品のギャラリーをワシントンに設立することを企図して蒐集を開始しました。彼が亡くなった1937年、彼は自身のコレクションを合衆国に寄贈する約束をしました。ギャラリー西棟建設のための資金は、A．W．メロン教育公益信託基金によって拠出されました。1941年3月17日に、フランクリン・ルーズベルト大統領は、アメリカ合衆国の人々を代表して、完成した建物とコレクションの贈呈を受けました。

アンドリュー・メロンが寄贈した絵画や彫刻の価値の高い作品が核となり、収集品はさらに増大しています。新しく設置されたナショナル・ギャラリーが、他のコレクターを惹きつけて寄贈が増えてくることをメロン氏は望んでいましたが、その希望はすぐに現実のものとなり、サミュエル・H・クレス、ラッシュ・H・クレス、ジョセフ・ワイドナー、チェスター・デール、エイルサ・メロン・ブルース、レッシング・J・ローゼンウォルドやエドガー・ウィリアムとバーニス・クライスラー・ガービッシュを始めとする、数百の寄付者から寄贈を受けることになりました。

当初の議会決議で確保された土地に隣接するギャラリーの東棟は、1978年に開設されました。それはギャラリーのコレクションが増加し、展示会期が長くなっていくのに対応し、また、先進的な研究センター、管理事務所、ライブラリー、および、拡大を続けている絵画や版画の所蔵庫を収容しています。この建物は、1978年6月1日、ジミー・カーター大統領によって、国に受託されました。建設のための資金は、アンドリュー・W・メロンの息子と娘である、ポール・メロンと晩年のエイルサ・メロン・ブルース、そして、アンドリュー・W・メロン財団が拠出しました。

1999年5月23日に、年間を通じて楽しめるように設計された野外彫刻庭園をオープンしました。この庭園は、セヴンス・ストリートとコンスティテューション・アベニュー北西にある西棟に隣接する6.1エーカーのブロックに位置しており、近現代の彫刻作品を形式ばらず、しかも優雅な環境で展示しています。

一般市民による諮問機関である蒐集委員会により、20世紀の絵画や彫刻を購入しています。主要な美術作品は、またパトロンズ・パーマネント・ファンドを通じてもギャラリーの所蔵となります。さらに、ナショナル・ギャラリー・オヴ・アートの友の会のメンバーは、数多くの特別なプログラムやプロジェクトのための資金を提供しています。彫刻庭園は、モリス＆グウェンドリン・カフリッツ財団から寄贈されたものです。

４．演奏者略歴

<u>ティエリー・フィッシャー</u>（指揮者）

1957年生まれのスイス人指揮者。BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団首席指揮者、ユタ交響楽団音楽監督。

フルートをオーレル・ニコレに師事し、音楽家としてのキャリアを、ハンブルク州立歌劇場およびチューリヒ歌劇場の首席フルート奏者としてスタートさせた。チューリヒでは、ニコラウス・アーノンクールにスコアを学び、強い影響を受ける。30代で、体調不良の指揮者の代役として指揮のキャリアを始め、最初のいくつかのコンサートでは、自身がクラウディオ・アバドの下で首席フルート奏者を務めていたヨーロッパ室内管弦楽団を指揮。アバドは指揮という自身にとっての新たな才能を励ましてくれた。オランダで経験を積んだ後、英国とヨーロッパの一流オーケストラに出演している。

2006年9月からBBCウェールズ・ナショナル管弦楽団の首席指揮者を務めており、就任披露公演ではフローラン・シュミット「詩篇47番」を指揮。同曲は英ハイペリオン・レーベルのフランス音楽シリーズ第1弾としてレコーディング。また、メシアン「トゥーランガリラ交響曲」は、ＢＢＣミュージック・マガジンの付録ＣＤとしてライヴ・レコーディングされている。同団とはアメリカ、スペイン、プラハにツアーを行ない、2009年8月にはシグナム・クラシックスより〈ストラヴィンスキー：バレエ『火の鳥』〉のCDをリリース。さらにＢＢＣプロムス（ロンドン）への毎年の出演に加え、メシアンとデュティユー作品の音楽祭などの共同作業を行なっている。

2001-06年のアルスター管弦楽団（北アイルランド、ベルファスト）の首席指揮者兼芸術アドバイザーの任期中は、プラハ、ニューヨークにツアーを行ない、BBCプロムスに出演。シューベルト、メンデルスゾーン、ベートーヴェン、ブラームス、シューマン、オネゲルのツィクルスを指揮している。ジャン・フランセ作品集のレコーディングより、ハイペリオンとの関係が深まり、彼の幅広いディスコグラフィーには、ASV、シャンドスなど英国のレーベルに加え、グラモフォン賞にノミネートされたヨーロッパ室内管弦楽団とのドイツ・グラモフォンへのフランク・マルタン作品集のディスクも含まれる。

タッチの軽さとテクスチュアの明瞭さが優れた特徴であり、それが彼の独特な解釈をもたらしている。鋭い様式感覚を持ち、バッハ、古典派、初期ロマン派から新ウィーン楽派、フランス印象主義にわたる広範なレパートリーに新鮮なアプローチをもたらしている。同国人であるフランク・マルタンとオネゲルの熱心な擁護者であり、プロコフィエフ、ストラヴィンスキー、ショスタコーヴィチの音楽に、特別な感情を抱いている。メシアンにも親しみ、2008年のBBCによるメシアン生誕100年を記念した企画では、中心的な役割を担った。サイモン・ホルト（BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団コンポーザー・イン・レジデンス）に代表される近現代の作曲家の作品をしばしばプログラムに取り入れており、ロンドン・シンフォニエッタには定期的に客演している。

2008-09シーズンには、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、オランダ放送フィルハーモニー管弦楽団にデビュー。特に後者とは、フランク・マルタンの演奏機会の少ない歌劇『嵐』を、アムステルダム・コンセルトヘボウの高名なマチネー・シリーズで指揮している。そのライヴ・レコーディングは2010年にハイペリオンよりリリース予定。アメリカでもニュージャージー交響楽団などいくつかのオーケストラにデビューしており、2009年10月にはインディアナポリス交響楽団にデビューした。

ヨーロッパでの人気はすでに確立されており、これまでにフィルハーモニア管弦楽団、リヨン国立管弦楽団、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、フランス放送フィル、ロイヤル・ストックホルム・フィル、ハノーファー北ドイツ放送フィル、ルガーノ放送交響楽団、ザールブリュッケン放送交響楽団などに客演。2009年12月には、ハインツ・ホリガーとともにバーデンバーデン＆フライブルクSWR（南西ドイツ）放送交響楽団にてマーラー、ブリテン、オネゲルなどのレパートリーを指揮している。

シンフォニー・オーケストラと並行して、スコットランド室内管弦楽団、ノーザン・シンフォニア、オランダ放送室内管弦楽団、パリ室内管弦楽団など、名門室内オーケストラとも密接な関係を築いている。

小菅 優（ピアノ）

高度なテクニックと美しい音色、若々しい感性と深い楽曲理解で、現在ヨーロッパを中心に世界で、最も注目を浴びている若手ピアニストの一人である。特に、『ダイナミックな音楽表現』（ハノーファー・アルゲマイネ紙）や『天使の翼の先端が頬に触れた瞬間を感じさせるピアニシモ』（フランクフルター・アルゲマイネ紙）など、ヨーロッパの聴衆から熱狂的な支持を得ている。2000年、ドイツ最大の音楽批評誌「フォノ・フォルム」よりショパンの練習曲全曲録音に５つ星が与えられたほか、02年に第13回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、04年にアメリカ・ワシントン賞、06年に第8回ホテルオークラ音楽賞、07年に第17回出光音楽賞を受賞している。

1983年東京生まれ。東京音楽大学付属音楽教室を経て、93年よりヨーロッパ在住。9歳よりリサイタルを開き、オーケストラと共演。ヨーロッパで研鑽を積みながら次々と演奏活動を重ね、その足跡はベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、パリ、アムステルダム、ブリュッセル、チューリッヒ、モスクワ、アメリカなど、年に４０カ所以上に及ぶ。

これまでに、国内主要オケをはじめ、ベルリン響、フランクフルト放送響、ハンブルク北ドイツ放送響、ハノーファー北ドイツ放送響、南ドイツ・フィルハーモニーコンスタンツ、サンクトペテルブルク響、フランス国立放送響、ポーランド国立放送カトヴィツェ響、シンガポール響などと、また、小澤征爾、大植英次、シャルル・デュトワ、ルドルフ・バルシャイ、デニス・ラッセル・デイヴィス、ゲルト・アルブレヒト、アレクサンドル・ドミトリエフ、オスモ・ヴァンスカ、ローレンス・フォスター、エリアフ・インバル、ヤツェク・カスプシク、クリスティアン・アルミンクなどと共演している。

05年にはサカリ・オラモ指揮フィンランド放送響との全国ツアーを行ったほか、11月にニューヨークのカーネギーホールでデビュー・リサイタルを行い、高い評価を得た。06年には、ザルツブルク音楽祭で日本人ピアニストとして2人目となるリサイタル・デビューを果たし、西村朗が小菅優のために書いた「カラヴィンカ」を世界初演したことでも話題を呼んだ。また、08年にはサー・ロジャー・ノリントン指揮／シュトゥットガルト放送響日本ツアーにソリストとして出演した。同年、ＮＨＫ交響楽団定期ではタン・ドゥンのピアノ協奏曲「ファイア」を作曲家自身の指揮で日本初演した。０９年には水戸室内管定期演奏会で小澤征爾と再び共演、大植英次指揮ハノーファー北ドイツ放送フィルとの日本ツアーも行った。2010年には大植指揮の同楽団定期演奏会に再度招かれ、モーツァルトのピアノ協奏曲第27番K595を披露。また、2010年ザルツブルク音楽祭で、イーヴォ・ポゴレリッチの代役としてフィリップ・ヘレヴェッヘ指揮カメラータ・ザルツブルクとショパン：ピアノ協奏曲第２番を演奏し、絶賛を博した。

2010/11シーズンは、樫本大進、川本嘉子、趙静とのピアノ・カルテットで室内楽演奏会、サイトウ・キネン・フェスティバル、姫路国際音楽祭、ユベール・スダーン／大阪交響楽団、ワシーリ・ペトレンコ／ＮＨＫ交響楽団、カルロス・ミゲル・プリエト／スペイン・ビルバオ交響楽団等との共演などが予定されている。

室内楽にも積極的に取り組んでおり、ジャック・ズーン、カール・ライスター、ポール・メイエ、豊嶋泰嗣、樫本大進、庄司紗矢香、佐藤俊介、イェウン・チェ、アントワン・タメスティ、堤剛らと共演。リサイタルにおいても、紀尾井ホール（東京）、いずみホール（大阪）でベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会（全8回）といった意欲的なシリーズをスタートするなど、着実に活躍の場を広げている。

ザルツブルクをはじめ、ラインガウ、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、シュヴェツィンゲン・モーツァルト、メクレンブルク・フォアポメルン、フランスのラ・ロック・ダンテロン、ラ・フォル・ジュルネ、サイトウ・キネン・フェスティバルなど、多くの国際音楽祭から招かれ各地で活躍している。